

# シカメガキ養殖への取り組み

クマモトオイスターの復活

養殖研究部 宗 達郎

## はじめに

シカメガキ *Crassostrea sikamea* は八代海や有明海などに分布し、形態的にはマガキに比べると小型で、殻長は4~6cm、殻周縁部の襞状が明瞭な特徴を持ち、生息条件はマガキより低塩分を好むとされています。以前はマガキの地方品種とされてきましたが、形態・遺伝的に別の種類であることが近年明らかにされました。またシカメガキは、1940年代に種カキとして対米輸出が行われ、アメリカではクマモトオイスターの銘柄で人気ブランドとなっています。

しかし、国内では現在までシカメガキの養殖は行われておらず、新たな二枚貝養殖対象種として種苗生産や養殖手法の開発が望まれていました。

カキ養殖では、海域を浮遊している幼生をホタテガイ等の殻に付着させた天然採苗による種苗を養殖するのが一般的です。しかし、シカメガキが生息する海域にはマガキも分布しているため、純粋にシカメガキだけの稚貝を入手するために、天然採苗以外の方法による稚貝の生産技術開発に取り組みました。

## 試験の概要

採卵：PCR法により、遺伝的にシカメガキと判別された天然のシカメガキを親貝として用いて採卵を行いました。

幼生飼育：ふ化した幼生は水温約25℃で、珪藻を幼生の成長にあわせて飼育水1ml当たり1,000~100,000細胞になるように給餌して飼育を行いました。

採苗：シングルシード方式（稚貝が個別に分かれた状態の稚貝を生産する方法）で採苗し、稚貝に変態させました。

## 試験の結果

採卵は平成19年6月21日から9月13日にかけて、計5回行いました。孵化した幼生の採苗までの生残率は0~17%でした。幼生は日齢15~19日で殻長250μmに成長し、その時点で採苗を行いました。また稚貝に変態した割合は生産回次により異なり0~16%でした。その後飼育を継続した結果、全ての生産回次の合計で約42,000個の稚貝を生産しました。

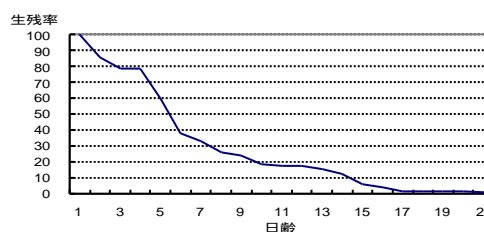


図1 幼生平均生残率

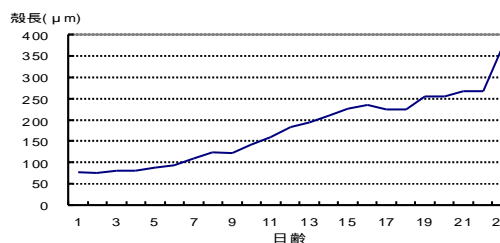


図2 幼生平均殻長

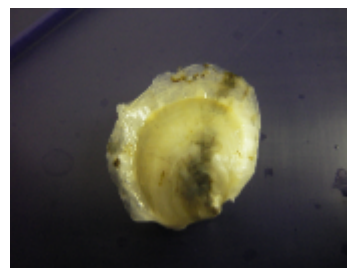


図3 付着後3ヶ月の稚貝

## 今後の検討課題

幼生生残率及び採苗付着率が低かったため、向上させるために種苗生産方法の改良を行うとともに、海域での成長や生残などの養殖試験も行う必要があります。